

英国中産階級とその思考様式

—『天使も踏むを怖れるところ』をめぐる—

秋葉敏夫

(1)

作家の手によるさまざまな評論、伝記、手紙類は、たぶん彼自身の小説の解説となる。人によって程度の差が見られるにせよ、『天使も踏むを怖れるところ』(Where Angels Fear to Tread, 1905)の作者、E. M. フォースター(1879~1970)の場合も、その例外ではない。彼などむしろ、自己の立場を表明する数多くの発言によって、その程度の高い方に属する作家であろう。12篇の短編と6冊の小説を残した彼は、比較的早くから、小説の筆を絶ってしまっている。しかしその前後から、この作家は新聞、雑誌、あるいは講演やら放送やらで、人間を取り巻く諸問題、政治、社会、文化、芸術などについてすぐれた考察を加え、彼自身の信条や好みを述べて、直接、間接的に自己の作品を説明する結果となった。とくに評論集、『アビンジャー・ハーヴェスト』(Abinger Harvest, 1936)と『民主主義に二度喝采』(Two Cheers for Democracy, 1951)に収められた各エッセイ、および『小説の諸相』(Aspects of the Novel, 1927)の鋭さを秘めた小説論は、おのずと彼の小説にサイドから光を当てて、その主題や構成を明かす役目を果たしている。

たとえばフォースターが、アラビアのロレンスとうたわれた、T. E. ロレンス(1888~1935)について次のように述べる時、これほど自分自身の心を端的に示すものは少ないだろう。彼はT. E. ロレンスの事故死に際して、このかなり伝説的な人物を追想し、その大著『七本の知恵の柱』(The Seven Pillars of Wisdom, 1926)を紹介しているのである。それはトルコに対するアラビアでの反乱を扱ったものだが、この著作から、ロレンスが砂漠の小さな泉のなかで水浴びしていると、予言者ふうな男がやって来て親愛の情がかわされる、そんな場面を引用し、彼はこんなふうに説明するのである。

T. E. は非常に気むずかしい人だった。それでいやすくも彼をよく知っている人はだれも、彼の性格を要約しようとは思わないだろう。しかし彼が英雄にふさわしい三つの美德、勇気、寛大、憐れみを持っていたのはたしかである。その勇気と寛大とを、彼はいこじなほど隠そうと努めたが、そうすることはできなかった。憐れみを隠すのはもっとやさしいのだ、……水浴でとてもうきうきしている、裸かになったこの小さな身体と、それをじっと見つめる間抜けな予言者のすがたは、われわれの心を思いやりと没我的な愛情の領域へと高めてくれるが、それ

がおそらく彼の本当の世界だった」。

T. E. ロレンスには欠点もあったけれど、フォースターはそれを認めたくらんで、彼の真価を精一杯理解しようとしている。そして多くの冒険談のなかから、ささいなエピソードを引き出して、彼は自分の理想にちがいないものを語るのである。勇気、寛大、憐れみは、フォースターが繰り返し賞賛する資質であり、また彼自身の思考と発言の基礎をなす。彼にとって勇気とは、困難な状況における行動力とともに、忍耐する力を意味している。寛大は人格の尊重のうえになりたち、自分の主義主張を押しつけて相手を束縛することのない、いわば控えめの態度をいうのだろう。また憐れみは、人間愛に基づく行動の源であり、政治的社会的諸機構に対する、人間尊重の精神にも結びついている。そしてこれらの背後には、思いやりや愛情に満ちた、まっとうな人間関係を志向する、フォースターの願いが隠れているだろう。ここに、少し長いものだが、彼が、信条とし、小説のなかで繰り返し扱う、人間の個人的関係について、彼の有名な宣言がある。

しかしながら、私は信念の時代に生きなければならない、……しかもそのなかで、自分の立場を維持してゆかなければならない。どこから出発するのか。

個人と個人の人間関係からである。ここには、暴力と残酷の充満する世界で、なにか比較的堅固なものが存在している。絶対頼りになるというわけではない、なぜなら心理学が「個人」という観念を粉碎し、われわれにはだれにも、予測できないものが存在すると教えてくれたからである、……Aは不変的にAではないし、Bも不変的にBではないが、それでも両者のあいだには、愛と誠実が存在しうるのである。生きてゆくためには、人格が堅固なものであり、「自己」が実在であると仮定しなければならず、さらに反対の証拠はすべて無視しなければならない。そして証拠を無視することは信念の特徴のひとつだから、私は人間の個人的関係を信じるものだと、たしかに宣言することができる。

その関係から出発して、私は現代の混沌にささやかな秩序を持ち込むのだ。人生を台なしにしようとするのでないなら、人びとを愛し信用しなければならず、したがって彼らもこちらを失望させないことが必要である。彼らはしばしば裏切るのである。それから教訓を引き出すと、私自身もできるだけ信頼できるものでなければならないということであり、こうあるように私は努める。しかし信頼は契約上の問題ではない——それが人間の個人的関係の世界と商売上の関係の世界との、主なちがいである。それは心情にとっての問題であり、契約書に署名することはない²⁾。

フォースターの小説はどれも、基本的には個人と個人の人間関係を取り扱い、そこにあらわれる人物の多くは、彼自身の生まれ育てられた、英国の中産階級である。それはフランスのブルジョアジーに相当するもので、だいたいこういう階級というのは、彼ら、あるいは一般民衆のいわゆ

る反封建的闘争を通じて、国家の指導権を獲得し、その社会の支配階級となった国民であろう。それはどこの国でも、すぐれた富と頭脳と行動力とによって、政治、経済、さらに文化の、中心的な推進者の役をつとめる。英国の場合は、とくに近代市民社会成立以後、そういった傾向が顕著なのであって、この作家は英国の国民性について述べる時、「英国人の性格は本質的に中産階級的である³⁾」と規定し、英国の中産階級のことを次のように説明している。

……彼らは産業革命によって富を、1832年の選挙法改正案によって政治的権力を獲得した。彼らは大英帝国の勃興と成立に関係している。そして19世紀の文学に責任がある。堅実、慎重、廉直、敏腕。想像力の欠如、偽善⁴⁾。

これは中産階級出身者の、中産階級に関する内側からの説明、ないし批判という点で、興味深いものであろう。それにまた、そうすることで中産階級の思考を抜き出ている、フォースター自身の思想的立場をもいくらか物語っていて、この解説は面白いものに思われる。中産階級に関するはじめの四つの特質は、むしろ称賛すべき性格であり、彼自身、それらの中産階級のいくたの業績に対する原動力と、みなしているはずである。ところが問題なのは、そして彼の小説でつねに批判の対象となるのは、いうまでもなく、その行動力と結びついた、のちの「想像力の欠如、偽善」である。つまりこれらは、人間関係のなかで大きな影響力をもち、そのまっとうな関係を達成するための、避けがたい障害となるのだ。たとえば「想像力の欠如」は、とくに相手の立場になってものごとを考えることができず、結果に対する見通しもわからない、といったかたちであられる。「偽善」は、中産階級の狙いが人びとの幸福とその実現方法であるにせよ、本質的には、それも必ず自己の利害問題とからんでいる、といった見方で扱われる。だが、それで終るのでなく、重要なのは、彼らがまったく無意識的に、その欠点に陥っているということだろうか。フォースターの描く多くの中産階級は、もはや封建制と闘いつつあった進歩的なものではなく、支配階級となって自己の権力にしがみつき、真相を隠してものごとを金と力で解決しようとする、いわばひとつの封建的な階級である。

しかしながら、そういう中産階級の硬化した心情を扱うものの、この作家が彼らに対する信頼と希望を失っていないことに、注意しなければならないだろう。それどころか、むしろその逆が正しいのであって、懐疑主義でおおわれる、後期の『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924)をのぞくと、彼の作品は多かれ少なかれ、人間愛から出発した、中産階級の救いの方向に向かっているといえるだろう。つまりフォースターにとって、中産階級の批判も、ただ破壊的な批判にとどまるわけではない。批判として出された自己の正しい認識が、彼の主要なテーマとなり、人間と人間のあいだの溝を埋める、彼の願いの基礎となる。そして、ライオネル・トリリングのこぼしを借りて、「彼は人間の可能性とその限界に満足している。もちろん人間のやり方には不満だが、なにか新しい美德が見つけれられると信じているのではない。彼の意見では、人間がもっとよくなることでなく、その生まれつきのよさを整理、分配することで、人間は人間にふさ

わしい生活ができるのだ⁵⁾」といってよいかもしれない。フォースターの試みるのは、当然のことながら、英国中産階級の思考様式を内側から解明して、ひとつの普遍性に到達しようとすることである。

(2)

二、三の短編をのぞくと、『天使も踏むを怖れるところ』は、フォースターの最初の小説である。彼の年齢は26歳で、彼の場合、その出発からほとんど成熟した才能を見せた作家であって、この作品には、その後繰り返えされる彼の特徴の数々を、すでにうかがうことができる。たとえばそのいくつかの例として、彼が伝統的な小説技法のもとで書いていることや、主題の設定、プロットの展開のさせ方、人間および土地それぞれの対比、それに写実のなかのたくみな象徴の使い方、などがあげられるだろうか。以下、それらに注意しながら、少し物語に即して、話を進めてゆこう。

まずはじめに、物語の中心的人物について考えてみたい。主人公をだれにするかは問題だが、いちおう、人生をひとつの見せ物と心得る、フィリップ・ヘリトンとみなせば、作品の構成がだいぶ明瞭になると思われる。なぜなら物語の動きとその結果が、たぶんに彼の方向に向かってゆくからで、物語の焦点は、周囲の出来事に対する、彼の心の反応ともいえるだろう。それは彼自身のひとつの精神的開眼を述べており、「疑問と幻滅と改悛の物語⁶⁾」である。ただこういう開眼の過程は、同時に、作家の小説技法上の問題でもあって、彼は大上段から説教するのではなく、問いかけの姿勢で、読者を、みずからの探究に連れ出すこととなる。

この作品における英国の中産階級は、ロンドン郊外の、因襲と偽善に満ちた小さな町、ソーストンに住む、ヘリトン家であらわされる。フィリップはその家の二番目の息子で、貧弱な身体と柔弱な性格のため、人生の活躍の場からは遠いところに位置する青年である。自意識が強くて、かなり知的な人物だが、良かれ悪しかれ、母親の典型的な中産階級の思考によって、いつも牛耳られている。ところが美的感覚が発達し、22歳のとき、彼はイタリアを旅行したことがあり、そこでイタリアの世界を美的にとらえ、「ソーストンを作りかえるかしりぞけたい、予言者ふうの態度で帰国した⁷⁾。」しかしこの意気込みは、まったく底の浅いもので、ソーストンの厚い壁にはばまれ、やがてどこかに消えてしまう。

……ソーストンでも彼自身のなかでも、なんの変化も起こらなかった。彼は5、6人の人びとを仰天させ、姉とけんかをし、母親といい争った。とうとう彼は、なにも起こりえないと結論を下したが、それというのも、美への愛が挫折する場合でも、人間愛と真理への愛が勝利を収めることもあるのを、知らないからだ⁸⁾。

この「美への愛が挫折する場合でも、人間愛と真理への愛が勝利を収めることもある」というのが、この作品のひとつの主題である。そこでは、ふたたび、イタリアが大きな役割をにない、

たんなる背景以上の意味あいをもつこととなる。フィリップにとって、イタリアはやはり美の国だが、そのイメージを粉碎させるに十分な、出来事が起こる。そして決定的な幻滅を受けるものの、彼は、イタリアでのその出来事を通して、人びとが自然に振る舞う、人間愛の豊かなイタリアを知り、ソーストンの閉鎖的な、冷めたい世界へ目を向けるという、精神面での開眼にいたる。ただしこんどの場合、それはたぶんに、家族の友人で、なにか慈善事業に専心する、ソーストンの若い婦人、キャロライン・アボット嬢によって助けられる。彼女は比較的想像力に富む、柔軟な精神の持主で、同じ出来事によるイタリアでの体験から、自己の世界を開くのだが、彼女がその発見をソーストン批判として、ほとんどいつもフィリップに語っているのに、注意しなければならない。

フォースターがこの作品で望むのは、個人と個人の人間関係の樹立というより、そのための条件の模索であろう。これには彼は、人間の生活に即した、いかにも人間臭い出来事を扱い、人間の行動に倫理的な意味を探ることで対処する。そして、ものごとを喜劇的に見つめながら、ときには暗示の力を借りて、写実を越えようとする、姿勢を示す。『天使も踏むを怖れるところ』は、それ故、動きがはやくて状況の豊かな、明確なストーリーをもつ小説である。その前半を簡単にまとめると、ヘリトン家の長男チャールズの未亡人である33歳のリリアが、10歳も年下のアボット嬢に付き添われて、しばらくイタリアを旅行することとなる。彼女はいささか自分なりに振る舞うほうで、ときには因襲的なソーストンの世界で、人びとを驚かさず行動に出たこともあったが、なにかと、義母のヘリトン夫人から、ヘリトン家にふさわしい一員になるよう、厳しく監視されてきた人間である。したがってイタリアでは、そういう目から自由になり、その小さな町モンテリアーノで、彼女は自分より10歳ほど年下の、イタリア人の歯医者の子、ジーノ・カラなる人物と恋に落ち、その求婚を受け入れる。ところがヘリトン家では、彼女がイタリア人と婚約という知らせがきただけで、詳細はわからない。そこでフィリップが、母親譲りの中産階級的欠点を鋭く体现している、姉のハリエットと一緒に、事情調査およびその結婚を阻止するために、イタリアへ派遣される。こうしてフィリップは、思いがけず、なまのイタリアとふたび接触することとなる。彼はジーノに、リリアを諦めてもらうため、代償として金を受け取らせようとするが、二人はすでに結婚しており、その努力のむなしいことを知らなければならない。しかし、リリアの結婚生活は、やがて彼女にとって、惨めな方向に向かってゆく。彼女は、ジーノが自分と結婚したのは金のためであるのに気づくし、イタリアの地方社会がやはり因襲的で、自分がそれに閉じ込められてくるのを知る。そして、彼は以前より自分勝手な人間になり、それと平行して、彼女は忍従の生活を余儀なくされる。だが、ジーノは自分に似た子供の父親になるのを強く望んでいるので、子供が生まれればものごとは解決されるかもしれないと、彼女は期待する。そして男の子を産むが、彼女はお産の床で死んでしまう。

前半の物語は、このように、リリアとジーノを中心に進むが、問題は二人の人間関係というわけではない。なぜならフォースターは、彼らの出会いや結び付きを、いかにもそっけなく、まるで事後報告的に知らせるからである。そのうえ彼らの破綻を、そこに性格以上のものが関与して

いと説明し、きわめてあっさり、民族間の問題として片付けてしまうのである。作家の意図は、物語のメロドラマ的雰囲気と喜劇的扱いを偽装として、そういう出来事をめぐり、ヘリトン家の反応にあるとあってよい。そしてヘリトン家の反応とは、ヘリトン夫人のそれであって、もちろん、彼女の中産階級の思考様式を指している。そこでヘリトン夫人の思考だが、彼女がフィリップとちがって、自分なりの現実感覚をもっているのは、別にどうということもない。ただ彼女が、体面やしきたりをあまりにも重んじ、なんでもそれを基準にして考えるのが問題なのだ。彼女の思考は、とうぜん狭量なものとなり、無意識的に、相手の人格を支配する方向に向けられる。そして作家の目が注がれるのはこの点であって、彼女は自分の思いが傷つけられると、ますます自己の俗物性をあらわにし、体裁をつくろい親切に見せかけながらも、卑劣で強引な態度に出る。たとえば、物語の発端となるリアのイタリアゆきにしても、それは、彼女には、ヘリトン夫人の支配に対し反抗気味のところがあるので、彼女をしばらく追い払うためであり、そのあいだに、リアの娘アーマに、中産階級の思考を植え付けてしまいたいからである。また、リアをアボット嬢と同行させたのは、アボット嬢に彼女を監視させるためでもあった。それからリアの婚約のとき、もちろん相手の社会的身分が問題となり、それがヘリトン家にふさわしくないとすると、夫人はただちに、それをつぶしにかかる。その理由は、「『その人は公爵かもしれないし、流しのオルガン弾きかもしれないわ。そんなことはどうでもいいの。もしリアがその人と結婚すれば、チャールズの思い出が侮辱され、アーマが侮辱され、わたしたちまで侮辱されるの。だからわたしは許しません、それでいうことをきかないなら、もう彼女とは縁を切ってしまう』⁹⁾」ということなのだが、このことばのなかに、ヘリトン夫人の典型的な思考様式が、端的に示されてしまうだろう。

フォースターの筆は、そういうヘリトン夫人の硬化した心情を、表面的には抑えながら、厳しい態度で追求する。そしてこれはまた、物語の後半で、夫人の意志を実行し、決定的な罪過を犯す、娘のハリエットの場合も同様である。しかし彼は、フィリップのように、たとえ軽薄で頼りなくとも、想像力や精神の柔軟さをいくらか残す人間には、かなり好意的である。つまり、「知覚力が申し分のない、完全な現実感覚で満たされるように、想像力が外的世界に向けられる¹⁰⁾」のが、彼の作品で繰り返されるもののひとつだが、それがこの『天使も踏むを怖れるところ』では、結果的にソーストン批判を産み出し、この青年を救出可能な人間にしている。

リアの事件が終ってから、フィリップはたまたま、アボット嬢と一緒にロンドンへ出かけたことがある。そのとき彼は、思いもよらない彼女の素質とそのりっぱな知性を見せられて、いささか驚く。そして、「彼女はしばしば気がきかないし粗野でさえあったが、陶冶させるとよい人間がここにいると、彼には思われた¹¹⁾」。だが、そういうことを感じるというのは、彼自身のうちにも、その可能性を秘めていることを暗示している。二人の話は自然とリアのことになるが、アボット嬢はそれを説明するうち、イタリア滞在のとき感じたソーストンへの気持を、フィリップに次のように告白する。

「あのね、わたしはソーストンを憎みましたわ」

彼はとても喜んだ。「ぼくもそうでしたし、いまでもそうなんです。それはすばらしいや。続けて下さい」

「わたしは、怠情、愚かさ、世間体、けちな没利己主義を憎みましたわ」

「けちな利己主義でしょう」と彼は訂正した。ソーストンの心理は、ずっとまえから、彼の専門になっていた。

「けちな没利己主義です」と彼女は繰り返した。「わたしは気づいたんです、こちらではだれもが、好きでもないことにわずかな犠牲を払い、愛してもいない人びとを喜ばせようと、わずかな犠牲を払って暮らしているんですわ。誠実になることをぜんぜん知らないのよ——それに、同じように悪いのは、楽しみ方をぜんぜん知らないの。それがわたしの考えたこと——わたしがモンテリアーノで考えたことですわ¹²⁾」

このアボット嬢の批判は、ソーストン出身者の、明確なソーストン批判として、少なからず注意すべきものである。それはリリアを助けるほど強力ではなかったが、すでにソーストンの偽善をとらえていて、フィリップのものより進んでいる。そしてアボット嬢がこのように彼に語るというのは、彼にとっては、自己のソーストン批判の再確認となり、それはまた、彼が自分の求める真実の人生に、数歩近づくことを意味している。

ところで、フォースターのこの作品では、土地および人間それぞれの対比が、いくつかたくみに使われている。もともと対比というのは、相反するものを並べてたがいに浮きあがる、あるいは片方を浮き彫りにする技法だが、ここで使われるのは、比較的後者の場合である。すなわち、相反する二つのあいだに、ひとつの不可視の動きが働くのであって、作家の意図するのは、たぶんその動きの方向である。たとえば土地の対比は、イタリアのモンテリアーノとイギリスのソーストンだが、イタリアはソーストンを批判するためのアンティテーゼであって、「ひとつの影響力、ひとつの生活様式¹³⁾」を意味している。そして、この作品の人間は土地と密接に結びついているが、人間の対比としては、二つの場合を考えておきたい。まず最初は、イタリアを代表するジーノとソーストンのヘリトン夫人やハリエットとの対比で、そこでは、前者の自然で本能的な精神により、後者の因襲と偽善に凝り固まった精神が、批判されるかたちとなる。もうひとつは、同じソーストンの人間たち、アボット嬢やフィリップとハリエットとの対比で、彼らは同じようにイタリア体験を経るのだが、前者はそれによって変貌を遂げるのに、後者はかたくなに自己の世界を守り、前者の変貌を浮き彫りにすることとなる。『天使も踏むを怖れるところ』では、このような対比が効果をあげて、作品の構成やプロットの流れを明確にしている。

リリアの死は事件を発展させる契機としての意味合いが濃く、物語の後半は、その生まれた赤ん坊をめぐる進められる。ヘリトン家の人びとは、リリアの出来事を醜聞とみなし、赤ん坊の存在をもみ消して、ソーストンの世界に知られないよう注意するが、これはいつまでもうまく続くわけではない。そのうえ、リリアの結婚に少なからず責任を感じているアボット嬢が、赤ん坊

の存在を知ると、それに深い関心を示してくる。そこでヘリトン夫人は、憐れみがないと思われたくない、その強い自尊心から、もはや赤ん坊を無視することができず、他人のアボット嬢が嫁の赤ん坊とかかわりあいをもつことを、なんとか邪魔しようとする。夫人はジーノに、いくつかの条件を出して、赤ん坊を養子にしてもよいと申し出るが、それは丁重に断られる。するとアボット嬢は、ヘリトン家の不誠意を見抜き、牧師補である彼女の父親と一緒に、赤ん坊を引き取ってソーストンで紳士に育てあげようと、自発的にイタリアへ向けて出発する。ヘリトン夫人も、体面上、黙っていることはできない。自分で赤ん坊を引き取るため、彼女はフィリップとハリエットを、急ぎよイタリアへ送り出す。こうして、作者は舞台を、愛情などひとかけらもない世界から、少なくとも人間愛だけは豊かな、イタリアに移すこととなる。

こんどのイタリアでは、赤ん坊をソーストンに連れ戻して育てることの是非をめくり、ハリエットとは対照的に、精神面での開眼を成就する、フィリップとアボット嬢の人間的な変貌が中心である。そこで作者は、ふたたび、はやめに伏線をおくことを忘れていない。ものごとを紳士的に解決したいフィリップは、ある夕方、相談にアボット嬢を訪れるが、そのとき彼女のなかに、英国では気づかなかった優雅さや軽快さがあるのを発見する。つまり彼女の人間性は、イタリアの広い世界を知ること、高められているわけだが、「彼は自分もまた、以前より優雅な人間になっているとは、思いもよらなかった。なぜなら、われわれは虚栄心が強くて、自分の性格を不変なものと考えており、それがたとえよい方へ変わったとしても、変わったとはなかなか認められないからである¹⁴⁾」と作者は述べている。やがて二人は、ジーノを通して、イタリアのより深いものに接触することとなる。ある晩、彼らはオペラを見に行き、そこでジーノに出会うが、フィリップは彼から、友だちというより足弟として暖かく歓迎され、彼の、そして彼の仲間の、開放的な人間愛にうたれる。だが彼には、まだ、ジーノはヘリトン夫人をからかっているだけで、その赤ん坊はたいして欲しがっていないと断定する、ソーストンの思考が残っている。いっぽうアボット嬢も、人びとが自然に振る舞う、自由なイタリア式観劇に接して、イギリスでは感じたことのない幸せな気分になる。そして、彼女の現在の目的は赤ん坊をソーストンへ連れ戻すことであり、彼女は、ソーストンのほうがすぐれた場所だとする、自分自身のソーストンの思考を反省しはじめる。ところで、それから完全に脱け出るのは、彼女が赤ん坊を救おうとして、翌朝、ジーノを訪問したときである。彼女はそこで、観念としてではなく、その生命ある赤ん坊をじかに見て、もはや命令することはできず、抱いていた目的を捨てようとする。それに、ジーノが赤ん坊の世話のために結婚しようとしているのを知り、また彼が赤ん坊を荒々しく、だが愛情をこめて入浴させるのに接して、彼女はソーストンの思考から、完全に脱却する。彼女は、まだ赤ん坊を救出しようとするフィリップに向かって、「『あなたはその子が、愛してはいるけどまず育て方を、父親と一緒にいるのがよいと思いますか、それともソーストンへ連れてきて、だれも愛する人はいないけど、立派に育てられるほうを望みますか。……どちら側で闘うのか決めて下さい』¹⁶⁾」ということができる。ところが、赤ん坊を連れ戻すのが母親の至上命令と考えるハリエットは、夜汽車に間に合うよう、赤ん坊をジーノの家から盗む。そして駅に行く途中、馬車が

衝突事故を起こし、赤ん坊は死んでしまう。フィリップは重傷を負うが、その死を知らせにジーノのところに戻る。すると、これを聞いたジーノは激怒し、フィリップの折れた腕に苦痛を与え、彼を絞め殺しはじめる。そしてそのすんでのところで、アボット嬢が到着し、フィリップは彼女によって助けられる。彼には、アボット嬢がまさに女神のような存在と思われるが、作者は彼について、「この善良な婦人を手本に、よい人間になりたいという、真剣な願いがわいてきた。これからは、努めて、彼女の啓示にあたいする人間となろう。狂おしい祈りや激しい太鼓の音もなしに、静かに、彼は改悛したのである¹⁶⁾」と説明している。

このような精神的開眼の過程が、作家にとって、いわば社会および人間認識の、ひとつの小説技法上の問題であることは、すでに述べた。フォースターの諷刺的要素は、後半の物語でも、活発に働いているのであって、それはたえず、ヘリトン夫人に向けられているが、それも結局は、赤ん坊に対する、その姿勢に要約されるだろう。たとえば、フィリップの次のことは、『『どんなものを犠牲にしても、わたしたちはたしかに、あの子を手に入れるためここに来たんです。母はお金はいくらでも出すとのことでした』¹⁷⁾』は、その姿勢を端的に示してくれる。つまり、エスカレートしたそういう態度、目的のためには手段を選ばず、生きた赤ん坊をもとみなして金銭で扱えるとする、彼女の思考様式が批判される。赤ん坊の死も、そのあやまちを決定的に証明するもので、赤ん坊の死んだ「彼女(=ハリエット)の馬車の転倒は、ソーストンの狭い倫理の転倒である¹⁸⁾。」それは盗んだハリエットに罪があり、また彼女を指図したヘリトン夫人に罪がある。

フォースターの場合、「小説のなかの倫理性は、じっさい、個々の論点を通して、究極的な人間の問題へと進んでゆく。¹⁹⁾」それは彼の諷刺的傾向と結びついて、的確な効果をあげ、彼の小説を、例の教養小説、思想小説の系譜にはめこむこととなる。たとえば、フィリップやアボット嬢とハリエットとの対比を重視して、この作品は、自分を取り巻く世界に注意と反省の目を送る、いわゆる精神的活動と、その世界を絶対的なもの、永遠に守るべきものと信じ込む、精神的怠情を扱っているといっても、それほど大きなあやまりではない。しかし、この作品の狙いは、まっとうな人間関係樹立のための、条件の模索であるというほうがより適切で、それには、批判として出された、ソーストンの思考あるいは態度の否定が、答えを暗示してくれるだろう。ただその答えも、人間関係樹立の必要条件というだけで、それで充分というわけではない。作家の心には、暖かい人間関係を志向しながら、その可能性への懐疑が共存しており、それがこの作品でも、人間のたしかな結びつきをひとつも描かないことで、すでにほの見えるからである。『天使も踏むを怖れるところ』は、それでも、その真剣な倫理性と目標に向かう積極性の故に、作家自身の、人間に対する信頼と希望を示した作品、とってよいだろう。

NOTES

E・M・フォースターの作品は、Edward Arnold, London の Pocket Edition による。

1) E. M. Forster: *Abinger Harvest*, p. 168.

2) E. M. Forster: *Two Cheers for Democracy*, pp. 77-8.

- 3) E. M. Forster : *Abinger Harvest*, p. 11.
- 4) Ibid., p. 11.
- 5) Lionel Trilling : *E. M. Forster*, Hogarth Press, London, 1959, pp. 21-2.
- 6) Ibid., p. 52.
- 7) E. M. Forster : *Where Angels Fear to Tread*, p. 79.
- 8) Ibid., p. 79.
- 9) Ibid., p. 24.
- 10) J. B. Beer : *The Achievement of E. M. Forster*, Chatto & Windus, London, 1962, p. 29.
- 11) E. M. Forster : *Where Angels Fear to Tread*, p. 84.
- 12) Ibid., pp. 86-7.
- 13) H. J. Oliver : *The Art of E. M. Forster*, Melbourne University Press, 1962, p. 26.
- 14) E. M. Forster : *Where Angels Fear to Tread*, p. 127.
- 15) Ibid., p. 167.
- 16) Ibid., p. 192.
- 17) Ibid., p. 121.
- 18) Frederick C. Crews : *E. M. Forster : The Perils of Humanism*, Princeton University Press, 1962, p. 78.
- 19) J. B. Beer : op. cit., p. 14.